

昔むかし。

ひとりの兵隊が、戦争が終わって故郷に帰るとちゆうでした。家族に会いたい一心で、寝るまも惜しんで歩いていました。

ある晩のことです。寒さのために木の幹にひびが入る音が聞こえるほどでした。兵隊は、どこか泊まるころはないかと思ひながら急ぎ足で歩いていました。

ずいぶん歩いているうちに、木の間に、明かりがひとつ見えました。行ってみると、おおかみと、ありと、海鳥が、たき火をかこんで、羊を焼いているところでした。

兵隊は、勇敢だったので少しもひるまないで、たき火のそばに腰をおろしました。しばらくして体が温まると、兵隊は立ち上がって、また歩きだしました。

ありは、兵隊のうしろすがたを見送りながら、

「あの兵隊にたのんで、羊を取り分けてもらえばよかった。よびもどそうよ」といいました。三匹は、兵隊を追いかけて行って、

「もどつて来て、ぼくたちの羊を分けてもらえませんか」とたのみました。

兵隊はもどつてくると、羊の胴体はおおかみに、頭はありに、内臓は海鳥に分けてやりました。みんなはとても満足して、こんなうまく分けてくれたお札に、それぞれが贈り物をしたいいました。

おおかみは、毛を一本ぬいて、兵隊にわたし、

「これがあれば、あなたはいつでもおおかみに変身できます」といいました。

ありは、自分の皮をひとかけらわたして、

「これがあれば、いつでもありに変身できます」といいました。

海鳥は、羽を一本わたして、

「これがあれば、いつでも鳥のすがたになって飛ぶことができます」といいました。

兵隊は、贈り物を受け取ると、お札をいって別れました。そして、鳥になって飛びあがり、その日のうちに故郷に帰り着きました。

故郷では、恐ろしい巨人のうわさでもちきりでした。その巨人は、すばらしい城に住み、だれひとり立ち向かえないほど強い力を持っていました。これまでに、六人の娘と結婚しましたが、みなむざんに殺されました。

兵隊が帰って来たとき、巨人は七回目の結婚をするところでした。花嫁は王さまの娘でした。兵隊は、お姫さまが、たくさんのお供を連れて巨人の城に向かうのを見ました。お姫さまが、あまりにも美しく、悲しそうだったので、兵隊は何とかして助け出そうと決心しました。

ある日のこと、巨人が狩りに出かけたすきに、兵隊は、ありにすがたを変えて、お姫さまの部屋にしのびこみました。そして、兵隊のすがたにもどると、おどろいてふるえているお姫さまにいいました。

「こわがらないでください。わたしはあなたを救いに来たのです。でも、どうしたら巨人を倒せるのがわかりません。どうか、巨人にとって何が命取りになるのか、聞き出してくださいませんか」

お姫さまは、

「わかりました。なんとかして、その秘密を聞き出しましょう」と約束しました。

兵隊がありになって行ってしまうと、そこへ、巨人が帰って来ました。お姫さまは、巨人にいいました。

「こんな話を聞きましたわ。あなたの命をねらって、鉄や水や火でせめたけれど、傷ひとつ負わせることができなかったって。でも、そんなのは作り話でしょう」

「いやいや、ほんとうにその通りなんだ。わしは不死身だから、だれもわしを傷つけることはできない。ただし、鳩の腹の中にあるたまごをわたしの胸の上で割らないかぎり、だ。その鳩は、野ウサギの腹の中にいて、その野ウサギは、おおかみの腹の中にいて、そのおおかみは、ここから八千里も離れたところにいるわしの弟の腹の中にいる。だからだれにも見つかりっこないのだ」

つぎの日、巨人が狩りに出かけてしまうと、兵隊がやって来ました。お姫さまは、巨人から聞いたことをすっかり話しました。兵隊はいいました。

「では、すぐに、鳥になって出かけます。あなたは、巨人が留守にするたびに窓にリボンをかけてください。たまごを持って帰って来たときに巨人とはちあわせしたくありませんから」

そういうと、兵隊は、鳥のすがたになって飛び立ちました。二日間で、弟の巨人の住むところに着きました。兵隊は元のすがたにもどって、巨人に使われている農夫の家にいき、家畜番としてやとってもらえないかとたのみました。農夫は、

「やといたいのはやまやまだが、わしの主人は家畜番を食っちまうんで、だれもいつかないんだよ」といいました。兵隊は、

「ぼくは、そんなひどい運命からは逃げ出して見せるさ」といいました。そこで、農夫は、兵隊を家畜番としてやとうことにしました。そして、牛を野原へつれていく前に、納屋なやにあるソバの実をひいて粉こなにしておくようにいつけました。

兵隊が、古い納屋に行ってみると、納屋のすみに古い刀がありました。刀には、「これを使う者はつねに勝利を手にする」という文句もんくがぎざまれています。兵隊は、その刀を服の下にかくして、牛を連れて野原へ出て行きました。

巨人は、朝の散歩さんぽをしていましたが、遠くから家畜番を見つけると、つかまえて食べてやろうと、野原にやって来ました。兵隊は、刀をぬいて、巨人のお腹を切りさきました。巨人は倒れましたが、切ったところから、おおかみ飛び出て、逃げだしました。兵隊は、すぐにおおかみに変身して追いついて、おおかみのお腹を切りさきました。すると、切ったところから、野ウサギが飛び出して、一目散いちもくさんに逃げだしました。兵隊は、すぐに追いついて、野ウサギのお腹を切りさきました。すると、切ったところから、鳩が飛び出し、大きく羽ばたいて逃げました。兵隊は、海鳥に変身してすぐに追いつき、鳩のお腹を切りさきました。すると、たまごが出てきたので、兵隊は大事に足の間にはさんで、飛びつづけ、二日のうちにお姫さまの待つ巨人の城に着きました。

見ると、お城の窓にリボンがひらめいています。巨人が留守だと分かったので、兵隊は、すぐさま窓から飛びこんで、お姫さまにたまごをわたしました。

その晩、お姫さまは、巨人の胸の上でたまごを割りました。巨人はすぐに死んでしまいました。

王さまは、お姫さまがぶじに帰ってきたので大喜びおよろこびしました。巨人を倒した兵隊とお姫さまは、結婚して、いつまでもしあわせに暮くらしましたとさ。

おしまい。

村上郁再話

資料『フランス民話集』新倉朗子訳／岩波書店